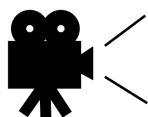




2010 年
会報 春

No.26

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



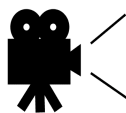
ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

花の便りも伝わる今日このごろ、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか？さて、春と言えば、もう会員の皆様にはお馴染みですね。シティ・ライツが年に一度、満を持してお送りする、

シティ・ライツ映画祭の季節です！特に今年は、トークショーのゲストに山田洋次監督にご出演いただけることになって、実行委員一同も、色めきだっております。もちろん、わたくしも(笑)。最初に出演交渉に行った時には、マネージメントの方から「山田監督の出演依頼は山ほど来るけど、200件のうち1件決まるか決まらないかの確率だからね。」などと言われ、「絶対むりだ——！」と半分、いや、9割あきらめていたのですが、当日、相撲協会関係の会合に出席する山田監督のスケジュールと、映画祭の会場・時間がちょうどよくハマったというのは天のお力か？「監督に是非、お越しいただきたい！」という私たちの気持ちも届いたのか・・・監督の「29日、行くよ。」の一言には、スタッフの方も、ビックリ仰天のご様子でした。しかし、「山田監督出演OK」のお返事をくださった時には、まるで自分のことのように喜んで下さって、「監督来てくれるって！よかったねー。よかったねー。ほんとによかったね〜。」と、興奮気味にお電話を下さいました。本当に感謝感激でした。おかげで、「虹をつかむ男」+トークショーのチケットは、早々と完売！遠方からも、たくさんの方にお申し込みをいただき、予定していたチケットはなくなってしまいました。只今、キャンセル待ちでの受付のみとなっていますが、この会報が届く頃には、もう SOLD OUT かもしれません・・・。惜しくもチケットを手に入れられなかった方には、本当に申し訳ありませんが、後でしっかりご報告させていただきますので、お許し下さい！

さて、上映作品「虹をつかむ男」の音声ガイドづくりも、ようやく終盤を迎えました。今年は、勉強会形式でしたので、はじめてガイドづくりに参加する方も果敢に取り組んで下さいました。皆さんとても苦心したようです。本当にお疲れさまです。その制作の苦労話は、特集のコーナーで制作メンバーが語ってくれますので、是非、映画祭にいらっしゃる前にお読み下さい。「雨に唄えば」の方も、すごいことになっていますよ！まず、字幕朗読キャストの熱演ぶりにご注耳です！全盲の女優にしてシティ・ライツの副代表・めーたんのディレクションの元、キャストの皆さんが持てる力をフルに発揮してくれました。ガイドの方は・・・、実は、まだできていません。というか、今年は生の実況ライブでお送りします。この作品は、CLCのリクエスト投票で第1位を獲得した作品！とはいえ、改めてガイドをつけるつもりで見てみると、映画は視覚的に魅せる要素がとても強く、正直、最初はガイドお手上げ状態になりました。延々ダンスの続くシーン。しゃべらずに顔や動きだけで笑わせるパントマイムのシーンも多いです。それに動きもコミカルで早い。衣装も凝っていて、セットもモダン。カラーもビビット。このビジュアル的な鮮やかさ、おもしろさを、いったいどうやって伝えたいのだろう？そこに、字幕朗読ディレクターのめーたんから鶴の一声が。「ライブでやれば？でなくちゃ、この映画の面白さ、きっと伝わらないよ。作り込みの型にはめたガイドじゃなくて、思い切って冒険した方がいいよ〜。」と。それまでは、時間もあり、手元にDVDがある場合、だいたい決まってつくりこみタイプで音声ガイドを仕上げてきましたから、敢えてライブでやる！という発想はありませんでしたが、確かにこの映画は、臨場感あふれるライブガイドで、まさに今、一緒に見ている一体感で伝える方が面白いかもしれない！ならば、この人しかいません。これまで展開の早いSFアクション、アドベンチャー、サイレント映画の「街の灯」までガイドをこなし、数々の難関を超えてきた、あの人。そう、檀さんです！でも、お祭なので、みんなで時間をかけて創り上げるものにもしたい、という想いもありましたから、複数のメンバーでライブガイドを分担し、さらにみんなで事後解説CDを作るというプランを考えました。それも日頃活動している、川崎、新宿、渋谷、池袋、有楽町、各チームの代表選出メンバーで結成！それぞれが、「雨に唄えば」を視覚障がい者にも、存分に楽しんでもらうためには、どんなガイドにしようか、どんなCDを作ろうか、一生懸命に、そして、とても楽しそうに考えてくれています。両作品とも、制作に関わった一人一人のアイデア、想いが結晶となり、キラキラ輝くような音声ガイドが聴けそうです。是非、皆さんにご来場いただき、みんなが磨き上げた宝石のような音声ガイドを耳に焼き付けていただきたいと思います！



活動報告

～同行鑑賞作品～

このコーナーでは、2010年1月～3月までに開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・1月17日/のだめカンタービレ 最終楽章 前編/川崎チネチッタ
- ・2月11日/ラブリーボーン/ヒューマントラストシネマ渋谷
- ・2月20日/インビクタス 負けざる者たち/川崎チネチッタ
- ・2月27日/ゴールドスランバー/川崎チネチッタ
- ・2月28日/おとうと/川崎チネチッタ



特集

第3回シティ・ライツ映画祭直前レポート

＋ガイド制作体験談＋調布映画祭をふりかえって

ミュージカル映画の金字塔「雨に唄えば」

～ライブガイド&事後解説チーム(チーム・レイン)キックオフミーティングreport ～

<ノンちゃん>

3月14日。第3回City Lights映画祭当日まで1ヶ月半となったこの日、表題のような会が開かれました。この会報が皆さんのお手元に届くころにはチーム・レインの活動も佳境に入っていると思いますが、ここでは、まだまだ何が起ころのか何をするのか、どきどきだった初日をレポートしてみます。こんな風にして始まったプロジェクトが果たしてどんな形に仕上がったのかを楽しみにご来場くださいませ。

開始時間の18時半少し前、いつもの集会室に入っていくとまだチームリーダーの檀さんは到着していません。参加予定のメンバー(同行鑑賞会を動かしていただいている川崎・有楽町・池袋・新宿・渋谷の各チームから選抜された有志の皆さん)もばらばらと駆けつけてくるので、その間を利用して、平塚リーダーから今回のプロジェクトについての簡単な説明が開始されました。「雨に唄えば」はとても楽しいミュージカル映画であることはおそらく誰もが認めるところ。でも、その楽しさをどうやって見えない・見えにくいお客様に伝えたいのだろうか？そこから始まったのがこのプロジェクト。今まで難しいと思っていたことにあえて挑戦するのであれば、思い切りはめを外して、音声ガイドのセオリーなんて吹っ飛ばしてみよう。今のシティ・ライツにできることを全てやってみよう。そして、やる側も観る側も楽しかったと感じられる上映にしたい。そのために、今までの映画祭にはなかったライブガイドを導入したり、メインガイドの檀さんを脇から支える数人のメンバーによるチームガイド制を取り入れたり、プロの活弁士の方に参加していただいたり、事後解説CDを作ったりと言ったことを考えてみました。でも、全てはこれから皆さんと一緒に作って行っていくものです。時間もなくて大変かもしれないけれど大成功目指してレッツ・ゴー！ と言っているところへ主役が登場です。ここからはDVDを再生しながら、この場面ではファッション評論家みたいにガイドして欲しいなあとか、次々に移り変わるシーンだからガイドもあたふたしてもいいんじゃないかなあとか、ここは台詞がなくてけっこう長いからアテレコ風に行こうとか、様々なアイデアが披露されて行きます。それに併せて役割を振ったり、事後解説CDの内容を考えたり・・・、あっという間に終了時刻が迫ってきました。始めは不安やとまどいのあったメンバーの皆さんの顔が、すっかりニコニコの顔に変わり、次のミーティングでの再会を約束して夜の街へ散って行ったのでした。



雨のち晴れ両国は虹

＜池田久美子＞

今回初めて音声ガイドの作成に参加しました。これまでに何本か音声ガイド付で映画を見た事はありませんでしたが、実際に作る側になるのは今回が初めての経験です。そんな私の失敗作をご挨拶代わりに、私の担当は、山道を上っていく場面から始まりました。「山道」「山道脇の岩」「山道の中腹」、場面の背景が判るようにと思ったのですが、「そんなに山道を歩かなくても登ってるのは判ってるよ～」ってモニターさんの声。確かにそうですね。初めに山道と伝え、息切れした話し声が聞こえるのですから、山道を上っているのは明らか。私は場面を切り取り、絵の説明をしてしまっていたんですね。見えるままに説明するにも、動きのつながりと移動、時間の流れを意識することが重要な事だと気付きました。当り前の事かもしれませんが、私には大きな発見でした。

そんな初歩から始まったガイド作成ですが、今回の「虹をつかむ男」の一番の難所は、映画の中の映画をどの様に表現するのか、これが大きな課題となりました。特に「雨に唄えば」の雨の中のダンスシーン。役名、役者名のどちらが良いのか？そんな議論から始まり、場面が変わったタイミングはどうするの？音楽も聞いてほしい。でも動作も伝えたい等等、皆の思いと知恵を出し合い話し合うこと数時間(ちょっとオーバー)。それでも完成には程遠く、もう一度各自の意見を持ち寄ることになり、未だ試行錯誤中です。

今回の作成にあたったチーム「RAINBOW」は私を含め初参加が多く、戸惑うこともたくさんありました。苦勞して搾り出した一言を、あっさりと「削りましょう」ってことは当たり前。初めから完璧はない！を心の支えに、この作品の面白さを皆さんと共有したいと思う気持ちで作成をしています。でも何をおいても、まずはもとの映画を楽しんでもらう事が大切。それをじゃませずに十二分に味わえるようなガイドになっていれば嬉しく思います。

それでは、皆様。4月29日江戸東京博物館大ホールでお待ちしております。「虹をつかむ男」を一緒に楽しみましょう。

編集長より：今回は映画祭記事の嵐ですね！！3月6、7日に行われた調布映画祭関連の記事もせっくなので載せておきます。自分は一日目のグラントリノのお手伝いに参加しましたが、雨にもかかわらず客の入りも良好で、作品もよいだけに反応もすばらしく良かったです。この作品のモニターに参加した蒔田さんが原稿を送ってくださったので掲載します

映画を楽しむということ

＜蒔田 麻耶＞

私は、一般の人たちからみると、映画をみる本数は少ないと思うが、映画に音声ガイドがつく前から映画館にいった映画を鑑賞していた。私は、視覚障害者だが、字幕も音声ガイドもついていない、洋画もわかって、わからなくても、楽しんでいる。最近では、洋画といわれる映画の中にも、中国語とかスペイン語とかフランス語などのものが出てきているので、これらのものには、音声ガイドと、字幕の朗読がつけば楽しめると思う。最近では、DVDを借りてきてみているし、音声ガイドのついたものも、探して借りてきてみている。CLOCには、同行鑑賞会に何回か参加しているのだが、今年、初めて音声ガイドのモニターに参加してみた。

私は、音声ガイドは、どのようにして作られるのかということが知りたかったので音声ガイドのモニターに参加することにした。私の選んだ映画は、洋画だった。そして音声ガイドの勉強会にモニターとして参加した。モニターはどのようなことをするのかというと、何人かの人が、手分けして作ってきた原稿の朗読を聴いて、意見を述べるのだが、まず、ガイドなしで1回、個人で課題のDVDをみるということからはじめた。私は、どこどこに音声ガイドをつけて欲しいかということをお知らせ事務局に送った。そうしたらガイド勉強会に参加した人たちは、私が送ったメールに書いたようにガイドをつけてくれた。そのガイドの原稿を映画とあわせながら、検証していくのだが、やはり検証していくにあたり、言葉の表現が問題になってくる。例えば、少年にしようか、それとも男の子にしようかなどである。

私が、その時に、勉強会に参加した皆さんにいったことは、【皆さんがみた感じはどうですか】ということと、【もし眼でみてよくわからないようでしたら、わからない所については、無理をしてガイドする必要はないと思います】ということだ。それから、場面展開というものが早く、どちらにカメラがむいているのか、わからないときや、ガイドをしようかなとおもった時には、次の場面にいっているなどのような時には、ガイドがつけられないこともあるので、音声によるガイドは、必要最低限でいいと思う。

この体験を通して、私は、一つの映画をじっくりみることができた。今年は、映画を沢山鑑賞する1年にしたいと思う。映画はみえても、みえなくても、また耳が聞こえなくても楽しむことができるものだと思う。

鑑賞会は、映画館での同行鑑賞会でなくても、点字図書館とか障害者会館などのような所でもできると思うので、参加することができるものには参加してみたいと思う。それから今回の勉強会で、ふだんあうことができない人たちとも知り合いになることができよかったし、たいへんだったけれども楽しかった。



特集

映画祭をめぐる～アカデミー賞を知ろう～

第3回目になりました、世界の映画祭を紹介するコーナー。この時期ですので今回はアメリカ映画の祭典・アカデミー賞を取り上げたいと思います

<概要> (ウィキペディアより)

世界一の映画賞のように報道されがちだが、基本はアメリカ映画を対象とした映画賞である。

しかし、その知名度と世界三大映画祭よりも古い歴史を持つ権威ある賞であるため、マーケットへの影響力は国際映画祭の各賞以上に大きく、受賞結果が各国の興行成績に多大な影響を与える。そのアカデミー賞の記念すべき第1回が行われたのは、1929年5月16日のこと。アカデミー賞というと華やかな印象があるが、もともとアカデミー賞という賞は、映画芸術科学アカデミーが誕生したときに付随して設けられたもので、これほどの大イベントになろうとは、当時は誰も予想していなかった。

労働組合対策としてできた映画芸術科学アカデミー

1927年ごろ、ハリウッドの撮影所では労働者が組合を結成し、経営者側と労働条件や賃金について激しく対立していた。当時の大物プロデューサーで経営者でもあったルイス・B・メイヤーは、組合に対し危機感を持った。そう遠くない将来、監督や俳優たちも組合を結成し、彼らに払う賃金は莫大な額になることを危惧するようになるだろうと。

そこでメイヤーは、彼らが動き出すより前に、ハリウッド映画人(制作者・監督・俳優・脚本家・カメラマンなど)の組織を結成し、そこで労働問題を話し合おうと思いついた。組合に先手を打ち、経営者側に有利になるよう話を進めようとしたのだ。メイヤーの自宅にコンラッド・ネイゲル(俳優)、フレッド・ニブロ(監督)、フレッド・ビートソン(製作者)の3人が呼ばれ、設立に向けての準備が話し合われた。

新組織の発足式が行われたのは、1927年5月11日ビルトモア・ホテル。集まった275人の中には、大スターのダグラス・フェアバンクス(初代会長)、ハリーとジャックのワーナーブラザーズ、監督のセシル・B・デミル、ヘンリー・キングなどがおり、いずれも当時のハリウッドを代表する映画人で、いわばエリート達だった。メイヤーの目的はあくまで組合対策だったが、「映画芸術および科学の質の向上をはかること」との大義名分が掲げられ、活動の1つとして「優れた業績に対する表彰」がつけ加えられた。晩餐会を開き、その場で発表を行うというものだったが、これが、後に世界的な一大イベントへと変貌を遂げていく「アカデミー賞」誕生の瞬間だった。

盛り上がらなかった第1回アカデミー賞。その理由とは？

記念すべき第1回アカデミー賞は、1929年5月16日に、ハリウッド・ルーズベルトホテルにて開催された。出席者は250名、チケットは\$10で売られていた。

今でこそ全世界の注目を浴びるアカデミー賞だが、当初はさほど話題性のあるイベントではなかった。映画業界のエリート達の内輪のディナー・パーティーのようなものだったということもあるが、盛り上がり欠けていた最大の理由は、授賞式当日の夕刊に受賞者がすでに発表されていたから。第2回目からは受賞者の名前が伏せられ、封筒に入れられて授賞式で発表されるようになった。

第一回の受賞部門は作品賞、主演男優賞、主演女優賞、脚本賞、監督賞、撮影賞、美術賞の7部門だったが、その後1934年に編集、音楽、1941年にドキュメンタリー、1947年に外国語映画などと、映画観客の規模や映画のジャンルの拡大とともに増えていった。



<補足>

ちょうどこれを書いているころ、今年度の受賞が発表された。アカデミー賞は今年からノミネート作品を倍の10本に拡大している。娯楽作品も入れようという狙いがあったらしい。が、ふたを開けてみると(イラクに駐留する爆発処理班の姿を描いた)『ハートロッカー』が受賞を独占。例年通り問題作が選ばれるという結果になった。伝統的な価値基準というものはそう簡単には変わらないのだな〜としみじみ。前評判が高く興行的にも大成功した『アバター』は受賞を逃したが、自分では『アバター』は難しいかなと予想していました。アカデミー賞は映画関係者の投票によって選ばれるわけでその3分の1以上は役者たちであり、役者が殆ど出てこない作品には投票しないだろうから『アバター』はバツだろう、ではなに？というところに興味がありました。結果的に落ち着くところに落ち着いたという感じだが、娯楽作をいれるべく作品数を増やしたわけだし、その辺を考慮した選考にしてほしいなと思いました。

(吉川 俊平)

勝手におすすめシネマ Vol.12 『赤目四十八瀧心中未遂』

今年のベルリン国際映画祭で最優秀主演女優賞に輝いた女優、寺島しのぶさんの肝の座った演技を堪能するには、やっぱりこれしかないでしょう！



『赤目四十八瀧心中未遂』(2003年)

監督: 荒戸源次郎

出演: 大西滝次郎、寺島しのぶ、他

この世に自分の居場所がない。そう絶望する生島(大西滝次郎)は、流れ着いた尼崎の古いアパートの一室で、来る日も来る日も焼き鳥にする臓物を捌き串に刺していた。

そんなある日、同じアパートに住む綾(寺島しのぶ)と出会う。綾の魅力にとりつかれ至福の時を味わった生島は、「この世の外へ連れてって」という綾の言葉に誘われて、死出の旅に出るのだった。

綾は大きな刺青を背負った女で、激しく男とまぐわうシーンもある。かなり度胸のいる役どころです。

父が尾上菊五郎、母が富司純子ともなれば、遺伝子的には100%名女優になれるものを持っているわけですね！わざわざこんな身体を張った仕事をしなくたって、女優としての道は明るく照らされているはずですよ。でも、あえて身体を張る。それが寺島しのぶの最大の魅力なんです。

暗くどろどろとした現実の中で生きる一人の生々しい女のはずなのに、何故か、凛とした透明感のある女性にも見える。“運命の女”とも“魔性の女”ともとれるファム・ファタール。そんな綾を演じることができたのは、やはり彼女しかいなかったのではないのでしょうか。

本作と同年に話題になった『ヴァイブレイタ』も必見ですし、もちろん、今回受賞のきっかけとなった『キャタピラー』も楽しみですよね！ちなみに、私はNHK大河ドラマ『竜馬伝』も毎週かかさず観ております。

いやいや、さすが“緋牡丹のお竜”の血を引くだけありますよ！と、お母様の話題になったついでに、私は『緋牡丹博徒シリーズ』では『緋牡丹博徒 花札勝負』(1969年)が大好きです！最近では『フラガール』(2006年)のお母さん役にもшибれてしまいました。

と、話が脇道にそれてしまいましたが、『赤目四十八瀧心中未遂』の何とも言えない魅力に満ちた世界を、ご堪能あれ！

(大田悠子)



思い出の映画

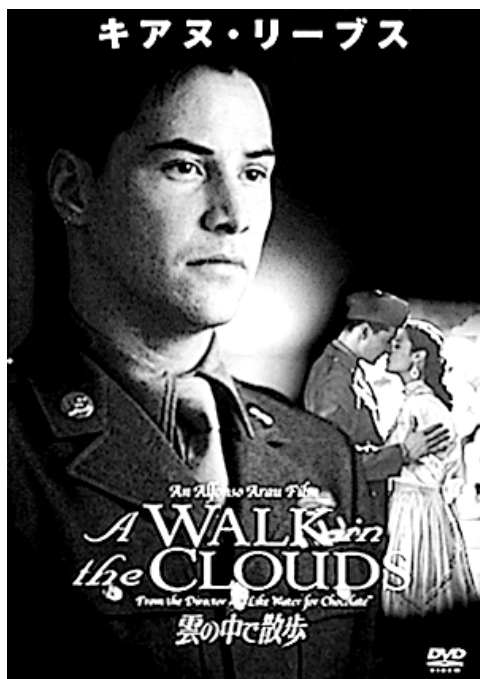
ー思い出は、名画とともにいつまでもー。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

私の思い出の映画

＜脇田 記代＞

映画好きの皆さんは今まで沢山の映画を鑑賞されてきて、それぞれ思い出の映画があるかと思います。今回私がご紹介する「思い出の映画」は「雲の中で散歩」です。



原 題:A Walk in the Clouds 製作年:1995年 製作国:アメリカ

監 督:アルフォンソ・アラウ

キャスト(役名)

キアヌ・リーヴス (ポール・サットン)

アイタナ・サンチェス・ギヨン (ヴィクトリア・アラゴン)

アンソニー・クイン (ドン・ペドロ)

ジャンカルロ・ジャンニーニ (アルベルト・アラゴン)

アンジェリカ・アラゴン(マリー・ジョゼ・アラゴン)他

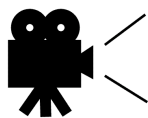
＜ストーリー＞ 第二次大戦が終結し、故郷に帰ってきたアメリカ兵ポールは、再会した妻ベティの愛が冷えきっているのを知る。出征前の仕事であるチョコレート店のセールスに戻るため汽車に乗った彼は、車中でヴィクトリアという美女にひかれる。彼女は妊娠中で相手の男に捨てられて心に深い傷を負っていた。彼女の実家はラス・ヌベス(雲)という葡萄園を営んでおり、厳格な父アルベルトは娘の不始末を許さないだろうと語る。同情したポールは彼女の夫を演じることを引き受ける・・・。

この映画は42年製作の同名イタリア映画(日本未公開)のリメイクなのだそうです。広大な葡萄園を舞台としたロマンティックなラブストーリー。ストーリーも映像もとてもクラシカルな感じの作品です。ひょんなことから偶然汽車の中で出会ったヴィクトリアの夫を演じるようになったポール。彼女の家族のいる「ラス・ヌベス」に滞在したほんの数日の間に起きる様々な出来事と心の動きを通して、「家族の絆」も取り上げた作品となっています。

この映画の良さは映像の美しさと、キャストそれぞれが魅力的な人物として映し出されているところだと思います。アラゴン家が営む「ラス・ヌベス(雲)」という名の広大な葡萄園は、本当に美しく、その映像はまるで絵のようです。光の中でまばゆく輝く緑と、土のコントラストやそよぐ風が心地よく、思わず癒されます。映画の中では霜警報が出た時に人々が繊細な団扇のようなものを蝶の羽のように動かし、火をおこした後温かい空気を葡萄の木々に送る幻想的なシーンなどもあります。チョコレートが好きでおちゃめなおじいちゃんドン・ペドロ、家族を愛しているのにうまく態度で表せないお父さん、皆魅力的で愛すべき人々です。

この映画を見た年、私は社会人となりました。社会人生活にも慣れてきて、仕事帰りに映画を見て帰ることを始めた頃でもありました。“自分の見たい映画を、自分の見たい時に見て帰る、自分だけのための時間”は何と贅沢な時間！と思っていましたが、この映画を見た時は、映画が終わった後に作品の感想を言い合える相手がなくて残念・・・と思ったのを覚えています。

今回、十数年ぶりに「雲の中で散歩」をDVDで見ました。今度は主人と二人で。お互いに感想などを話しながら映画を楽しみました。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2009年12月15日～2010年3月15日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員]・澤井マリ子(静岡県御殿場市在住)・一色直美(東京都大田区在住)

[賛助会員]・松浦洋子(大阪府大阪市在住)

■『音の城♪音の海—SOUND to MUSIC—』の音声ガイドに協力します！

もう7年ほど前になりますが、まだまだシティ・ライツが活動をはじめて間もない頃、映画美術学校に通っていた服部智行監督は、なんと奇特なことに、私達シティ・ライツの長編ドキュメンタリー「citylights」を制作してくれました。1年間、音声ガイドづくりの現場はもちろん同行鑑賞会などにも駆けつけて、カメラを回すだけでなく、時には誘導ボランティアも手伝ってくれました。その作品は、故・佐藤真監督や是枝裕和監督にも高い評価を得たとかで、ユーロスペースやアテネフランセ文化センターでも上映されました。さて、その服部監督の次回作が、5月29日より、渋谷のアップリンクで公開されることとなりました！服部監督が次にカメラを向けたのは、「音遊びの会」という、音楽家と、自閉症やダウン症などの知的障害を持つ人、音楽療法家による即興演奏を目指し、ワークショップを継続しながらホールなどで舞台活動を行う団体でした。4年に渡る撮影の末、ようやく完成したのが、この「音遊びの会」が奏でる即興音楽誕生の物語を追った感動のドキュメンタリー『音の城♪音の海—SOUND to MUSIC—』なのです。

私たちのドキュメンタリーをとってくれた監督です。当然のごとく、音声ガイド付き上映を行おう！ということになりました。もちろん、音声ガイドの制作は、私たちシティ・ライツが協力します。音声ガイド付き上映は、6月第2週、3週の土日いずれかで開催できればと相談しているところです。詳細が決まりましたら、ご案内いたします。是非、ご期待下さい。



『音の城♪音の海 -SOUND to MUSIC-』(2009年/ドキュメンタリー/カラー/90分)

出演:音遊びの会、ゲストミュージシャン(石村 真紀、江崎 将史、大友 良英、片岡 祐介、千野 秀一、林 加奈、森本 アリ)

監督・編集:服部智行

(作品紹介) 聴こえますか? あなたの世界を変える音楽 見事なまでの失敗の連続が、やがて静かに〈音楽〉を奏ではじめる——。知的な障害を持つ人たちと、音楽療法家、音楽家たちによる即興音楽。公演までに重ねられたセッションと対話を丁寧に綴った珠玉のドキュメンタリー。世界中には様々な人がいて、様々な音があります。何を音楽と感じるのは人それぞれ。——これは音楽?それともノイズ?知的な障害を持つ人たちにもそれぞれの感性で感じる音楽があります。それは躍動する身体や笑顔、些細な動作、小さな声や息づかいの中にもあります。そんな音楽にそっと寄り添い、共演しようとする、独自の音楽を模索してきた音楽家たちの楽しい苦闘。その果てに聴こえてくる音楽はどんな音楽でしょう。映画館を出たあと、耳をすまし世界の音を聞いてみてください。あなたの世界がちょっとだけ変わっているかも?

■シティ・ライツ 2010年度総会のお知らせ

下記のとおり、2010年度の総会を開催いたします。

正会員の方は、5月25日までに、シティ・ライツ事務局まで、出欠のご連絡をお願いします。

2010年度総会

日時:5月30日(日曜日) 10時～12時 場所:東京都障害者福祉会館/集会室B1

※JR田町駅から誘導をご希望のかたは、前日までにシティ・ライツ事務局までご連絡下さい。

・総会へご出席の方は、氏名と、誘導の希望の有無をお知らせください。

・欠席の方は、総会の議決を議長に委任することを示す委任状をお送りください。





編集後記

編集スタッフ・イラスト描きやレイアウトデザインの
スタッフ也大募集！希望の方は会報編集課まで！

（会報編集課 ノンちゃん）

映画祭の準備に実行委員長として関わらせていただくのが3回目ともなると、そろそろ次の方にバトンタッチしたいなあなどと思うことも度々。それでも、がんばれるのは、きっと、たくさんの方々からの暖かいお気持ちや優しいお言葉、力強いエネルギーという、大きな大きな宝物をいただけるという幸せがあるからなのかなあ。今回はそう強く思わずにはいられませんでした。

世間には不況の冷たい嵐が吹き荒れ、あちらこちらで姿を消して行ってしまう企業がある中、覚悟を決めて営業活動を始めた私たちのもとに、なんと昨年に引き続いてご協賛いただけることのお知らせが届く度、本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、個人協賛という形でご協力いただいている皆さんにもとっても感謝しています。

心を込めて作った映画祭。いらしていただいたお客様みんなが元氣な笑顔でお帰りいただけるように、最後の仕上げにいそしもうと思います。

（会報編集課 大田）

まだまだ寒いなあ……なんて感じる日もありますが、陽射しはもうすっかり春色です。

そんなうらかな季節がやってきましたが、歓送迎会だ、花見だ、などと来る日も来る日も飲んできてはいませんか？

そんな方々のために、私がときどき実践する悪酔いしないお酒の飲み方が3つありますので、ご紹介したいと思います。

1. 飲む前に乳製品を飲む。
2. ウコンを飲む。
3. ビタミンCの豊富なお酒を飲む。

まあ、大した方法ではありませんが、知って損することではないので、軽〜く受け流してくださいね♪

（会報編集課 吉川）

みなさんこんにちは、だいぶ暖かくなってきましたね。毎年書いているのですが自分は強い花粉症持ちです。花粉症に効くといわれているヨーグルトを秋ごろから毎日食べ続けていますが、やはりなりました。例年に比べると症状が弱いので効果があったのかなと解釈しています。今年度（現在3月16日）は、新宿区に住む一映画ファンとしては非常につらい一年でした。映画は新宿で鑑賞することが多いのですが、多くの感動をいただいた映画館が次々に閉館してしまいました。テアトルタイムズ・ジョイシネマ・オスカーなどなど。シネ・シティと言われた歌舞伎町近辺の映画館は7割減りました。不況のせいとは思いますが、パイが小さくなっていくのは残念なことです。来年度は、いろいろな映画館に足を運ぼうかなと考えています。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は2010年7月10日。投稿される方は、6月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス＜kaihou@citylights01.org＞まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2010年 春号 2010年4月10日発行 編集：吉川 俊平、齊藤 恵子、大田 悠子
発行者：パリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

